東北風景写真家協会会員向け会報「東風季報」第24号です。
当会報は会の行事、活動計画、各種のお知らせ、撮影適所、撮影情報、撮影テクニックなどの記事を掲載しております。

東風季報

発 行
東北風景写真家協会
〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-8-15
東北カラーデュープ内
Tel 022-256-2141, Fax 022-256-2142
編集　秋葉・進藤・藤枝

今後の協会企画ご案内

今年の桜開花予測は南と北では大きくずれて、各クラブや団体での事前撮影会計画は困難を極めたのではないでしょうか。当協会の企画も今年の紅葉シーズンは例年通りになるのか少し心配ですが、別欄の通りご用意いたしました。多くの会員のご参加をお待ちしておりますが、既にご案内をしている案件もあり、参加人数に限度がありますので、お早めにお申し込み下さい。

天空の絶景中央アルプス「千畳敷カール」天下の秀景「上高地」撮影ツアー企画

東北周辺の撮影地は会員の加盟している各クラブや撮影ツアー等で出かける機会は多いと思いますが、今回の撮影ツアー「中央アルプス・千畳敷カール」や「上高地」は個人やクラブではなかなか行く機会が少ないと思いますので、企画しました。特に千畳敷カールにあるホテルは紅葉シーズンは人気が高く、予約を取るのが大変なこともあり、早めに企画いたしました。

（撮影ポイント）

・ケーブルを降りた所にある「千畳敷ホテル」に宿泊お天気に恵まれれば、雲上の絶景千畳敷カールで赤く焼けた山々の夕景や町明りの見える夜景、カールをバックにした星空撮影を。

・上高地の合羽橋近辺の「ホテル白樺荘」に宿泊。上高地の夕日に色付く山々や紅葉風景、朝日に輝く穂高連峰やガスの漂う大正池、霜の降りた白い田代湿原等とが期待できます。

時間を気にせず、マイペースで心行くまで撮影を楽しめるのではないでしょうか。

旅行期間　平成２５年１０月１日（火）～３日（木）２泊３日

代金　５９，８００円

添乗員　同行なし

募集人員　３５名（最少催行人数３０名）定員になり次第締め切り。

食事条件　朝食２回・昼食１回・夕食２回

宿泊先　①千畳敷ホテル　②ホテル白樺荘（各４～６名１室）

撮影場所がすぐ傍です。

集合場所　泉区役所

駐車場　６時４０分

仙台駅西口　７時２０分

同行講師　竹内　正・丸山　慎一

お問い合わせ・お申込み　河北新報トラベルまで

ＴＥＬ　０２２－２１１－６９６０

ＦＡＸ　０２２－７２３－４６７２

営業時間　９：３０～１７：３０まで（土曜・日曜・祝日はお休みです）

お申し込みは河北新報トラベルのみの受付となります。

千畳敷カールの星空

上高地・田代湿原

第７回撮影実習セミナー開催ご案内

今年初夏の新緑撮影実習セミナーを開催いたします。今回は初めての撮影実習場所になります。

実施期日　６月13日（木）

撮影地　西公園・定禅寺通り周辺

集合場所　西公園ＳＬ前

参加費　２，０００円（雨天決行）（会場費、ＰＣ機材及び資材費用途に充当）

講師　竹内　正会長

募集人員　２０名（フィルムカメラ、又はデジタルカメラ合計での人数で、定員になり次第締切ります）

参加申し込み方法

電話：携帯・０９０－５５９４－１４３９丸山

ＦＡＸ：店頭チラシ下段の申込用紙を事務局０２２－２５６－２１４２にお申込の会員には、６月１０日までに、参加票を送付いたします。

参加費は当日集金いたします。なお、今回の昼食は各自会場最寄りのお店でお取りください。

セミナー会場

仙台市市民会館

地階「視聴覚室」

主な予定

9時40分～11.時40分撮影（定禅寺通り、西公園）

12.時～12時40分昼食（各自　自由食）

13時～16時30分

講師セミナー、作品セレクト、講評

17時　終了、解散

撮影はリバーサルフィルム又はデジタルカメラリバーサルは増感、減感、マウント指定不可。

デジタルはＪｐｅｇファイルのみ。

フィルムセレクト用ライトボックス、ルーペ、マウント５コマ、はさみ等は用意します。

デジタルはパソコンにて画像を５点セレクト後、ファイルを保存し、デジタルプロジェクターで映写、講評します。

なお、参加された方の作品を一部選考しホームページに掲載します。

花咲けヌッマヴ！　サクラ さくら 桜（仙台展）と「風景写真」編集長・石川馨氏スライドアンドトーク

前編「花笑み編」５月９日～１４日・後編「花酔い編」１６日～２１日の期間で富士フイルム企画展「花咲けニッポン！」が富士フイルムフォトサロン仙台で開催され、１１日（土）には「風景写真」編集長・石川馨氏のスライド＆トークイベントが開催されました。冒頭、石川編集長は写真撮りのプロではないが多くの作品を見て、チョイスし、提示することではプロで、一つ一つの作品の意図、選んでいる訳、展示の仕組みをお話しされた。東京の富士フォトサロンでは大きなパネルは幅３．６ｍ（３枚繋ぎ）を展示。生々しく、魅力のある作品で、２８，０００人の入場者があったとのこと。

写真展はきれいな写真だけではなく、全体としてどう意図し、何を伝えたいかが大事。この企画は震災後の暗い時期、日本を元気に、見て楽しい気持ちになってほしく、桜を題材に選んだ。写真展は一般に撮る人が多いが、撮らない人達にも楽しんでもらう企画。又、銀塩プリントの魅力を伝えたい。カメラはフィルムだけではないが、ディテール、空気感、奥行き感が銀塩プリントの魅力。風景写真に於けるアマチュア写真家は自由でプロでも撮れない写真も多く実力も凄い。

展示された作品は写真集「サクラ・さくら・桜」に掲載されたもので、本物は大変見応えがありました。

平成２５年特別作品展示会開催

一年おきに開催している写真展は昨年第３回をせんだいメディアテークにて開催し、次回は来年の予定ですが、今年度事業計画に記載しました特別展示会で「私の原風景」を開催することに決定いたしました。会場はＡＥＲ（アエル）ビル２９階にあるニコンプラザ仙台フォトギャラリーをお借りし、開催期間は８月２１日（水）～９月３日（火）の２週間。時間は午前９時３０分から午後６時まで、休館日は日曜、祝日です。最終日は午後３時迄で終了後作品を搬出します。作品搬入日は８月２０日午後３時以降で、搬入は協会新事務局をお願いしております東北カラーデュープ株式会社に一括搬入依頼。展示はニコンギャラリーの専属業者が行います。

今回会員の皆様にご案内した結果３３名の方が参加され、展示作品は半切サイズで４６点になります。

参加会員の方には参加費として２，０００円ご負担頂きますが、展示業者への支払いと案内はがきの作成費用、郵送料等の必要経費に充当致します。

今回の写真展開催に当たり、写真誌「風景写真」社編集部より進藤幹事長宛に電話が入り、当協会のホームページで写真展の開催案内を見たので、「風景写真」の写真展開催案内に掲載してみないか？とのこと。写真展の内容とクラブの紹介原稿を秋葉副会長に作成してもらい、、展示作品の内、会員の方（役員・幹事は除く）の１０点を竹内会長が選び、８月２０日発売の９・１０月号に掲載されることになりました。是非ご購入、ご覧下さい。

裏磐梯賛歌　土リア別撮影ガイドについて

北塩原村でペンション「くらんぼーん」を経営しながらこの裏磐梯賛歌・エリア別撮影ガイドを発行されている黒原範雄さんの記事は、昨年１２月発行の「東風季報」第２２号に掲載しておりますが、今般、６月６日（木）～１２日（水）の日程で富士フォトサロン大阪にて「ふくしま復興の支援チャリティー写真展」が開催されます。また、来年３月２４日～３０日の日程で出身地の高知・市民ギャラリーにて「くらんぼーんＣＬＵＢ」の人達との「支援チャリティー写真展」も開催の予定。いずれも震災で親を亡くされた子供達の支援と仮設住宅で生活する人達の心のつながりを目的に「こころたすふれあいコンサートの支援に活用するとのこと。会員の皆様も福島の元気を取り戻すために、宿泊や本の購入等で黒原さんへの応援をお願い出来れば有り難い限りです。

お知らせ

★写真コンテスト上位入選者

今号は該当者なし、写真雑誌やコンテスト上位入賞した方はご連絡願います。

★新規入会会員紹介

宮城県仙台市　安達　良子

宮城県仙台市　熊谷　まさ子

宮城県仙台市　表　伸也

★ホームページ「私の１枚」に掲載の作品送付依頼

前号のお知らせ欄でもお願いしました当協会ホームページ内のＷＥＢギャラリー「私の１枚」に掲載する会員皆さんの作品を募集いたしてます。

今回開催のニコンフォトギャラリーでの写真展も「風景写真」誌編集部の方がホームページを見て同誌の「クラブ展ＰｉｃｋＵｐ欄」への掲載につながりました。この様に多くの方が当協会のホームページを見ています。是非、積極的に作品をご送付下さい。

送付先：

ポジ・２Ｌプリント：進藤（青葉区中山台４-１４-４）

デジタル画像（容量１メガ程度）ｉｎｆｏ@ｔｏｈｏｋｕ-ｆｕｋｅｉ.ｃｏｍ

写真の歴史（Ⅱ）

銀板写真発明４年後の１８４３年（天保１４年）に、オランダ船により長崎に日本最初の写真機材が持ち込まれ、その機材を蘭学者の上野俊之丞がスケッチしてます。機材自体は持ち帰られた。

１８４８年（嘉永元年）には島津斉彬が銀板写真機材を入手。１８５４年（安政元年）にはペリーが再来航し、写真家のエリファレット・ブラウンを伴って人物や日本各地の風景撮影をしていた。

１８６１年（文久元年）鵜飼玉川が江戸薬研堀で日本人最初の写真館を開業。日本の写真の祖として知られる上野彦馬は長崎医学伝習所で写真術の研究をおこなっていて、プロの写真家ピエール・ロシェから本格的な湿式写真を学び、１８６２年には上野撮影局を開業して、ここで撮影された坂本竜馬の肖像写真が有名です。

もう一人の祖、下岡蓮杖も同じ年に開業しています。その後日本各地に写真家が開業し、幕末には島霞谷が下谷に写真館を開業、妻の島隆は日本最初の女流写真家となりました。

乾板写真が入ってきたのは１８８３年（明治１６年）で、江崎礼二が隅田川で行われた水雷発火試験の撮影をしたのが最初といわれています。

１８８９年には写真を写す人が増え、日本初のカメラ同好会・日本写真学会が設立された。

１９０３年（明治３６年）には、小西本店（後のコニカ）が日本初の市販カメラ「チェリー手提用暗箱」（輸入品）を発売。初の国産カメラは、１９２９年日独写真機商会（後のミノルタ）が発売した「ニフカレッテ」です。国産初の乾板（フィルム）は東洋乾板が１９２１年（大正１０年）に完成させた。国産ロールフィルムは、１９２８年、旭日写真工業が「菊フヰルム」を、翌１９２９年に小西六本店が「さくらフヰルム」を、１９３１年に大日本セルロイドが「大日本フヰルム」を発売しました。そして、１９３４年、大日本セルロイドが分社化して富士写真フィルムが誕生。すぐに東洋乾板を吸収合併し、間もなく国産初の映画用ポジフィルムが完成。翌１９３５年に写真フィルム（モノクロ）も完成しました。　しかし、この年、コダックが世界初のカラーフィルム「コダクローム」を発売しています。国産は１９４０年、小西六がカラーフィルム「さくら天然フィルム」を発売しました。その後フィルムは改良を加えて高性能化していきましたが、１９７５年、コダックが世界初のデジタルカメラを開発して、新しい写真の世界が始まりました。

（進藤弘融）

ピンホールカメラで遊んでみませんか

写真の原点はピンホールカメラではないかと勝手に思っている。もともとカメラの原理はここにあるのだから、自分でも出来ないかなと考え、デジカメで作ってみた。

ピンホールカメラの作り方。

材料

１．デジカメ（レンズ交換の出来るもの）
レンズが装着されてなくてもシャッターが切れるもの。これ大事。

２．ボディキャップ（カメラを扱っている店で４００円～５００円位）

３アルミ箔

４．テープ（不透明なもの）

工具

１．ボディキャップに穴をあけるドリル。（０．２ｍｍ０．～０．３ｍｍ位）

２．紙やすり（穴のバリを取る）

３・縫い針（ピンホールを開ける）

作り方

ボディキャップの中心にあけること。

ボディキャップのど真ん中にあけること。

ボディキャップをカメラ本体に装着出来上がり。

作成中はブロアを準備して、カメラ本体に埃やごみを入れないこと。

ピンホールカメラの場合、埃やごみはかなり目立ちます。

ピンホール写真の特徴はレンズを使わないので歪みや収差がない。

パンホーカスの画像。

針の穴なので開放値が小さいから、光量がすくなく露光が長い等でしょう。

撮影は

ピンホールカメラの絞り値は、「焦点距離÷ピンホール径」で求めると

フランジバックまでの距離はメーカーによって若干差があるが４５ｍｍ位でしょう。

０．３ｍｍの穴の場合、約５ｍｍの穴をあける。

ボディキャップの裏側にアルミ箔を貼りテープで光が入らないようにしっかり押さえる。

アルミ箔に針の先を一寸突いて穴を開ける。

アルミ箔に針の先を一寸突いて穴を開ける。

ピンホールカメラの絞り値が大きいから、シャッタースピードは長くなります。必ず三脚をつかいましょう。

シャッタースピードの目安は

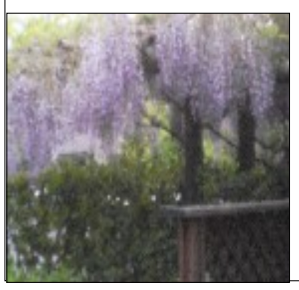
晴れ1/15～2秒

曇り1/2～10秒

日中の室内15秒～30秒

夜間40秒～です。

（藤枝克治）



F150の計算です。

Photo Books　日本の自然風景　５０人の写真家達

副題に５０人の目がとらえた珠玉の日本風景３９３！とある。各写真家が自然風景への思いを込めた主題とそれを表現する狙いや取組みを述べており、作品理解へのメッセーが伝わってくる。

例えば、赤塚一氏は「ふるさと新潟　心の原風景を語り撮る」と題し、自然との一期一会を切り撮ることの心意気を語っておられる。

日頃地元で写した四季写真から、さらに編集者と監修者により選び抜かれたものです。

作者ごとに４ページに８枚前後の風景写真が掲載され、さらに詳細な撮影データも添えられている。多くの知られた場所やほとんど気が付かれなかった場所の情景や着眼について作者自身の解説があり、決して偶然ではない周到な準備と感動が伝わってくる。本による写真展のようなもので、もしこれが大判のプリントだったらと想像するのも楽しい。

作品はほとんどがポジフィルムによるもので、その微妙な色合いや深みが感じられ、フィルム写真の集大成のような印象である。

巻末には50人の写真家のプロフィールや連絡先も示されており、さらに情報を得ることもできよう。

（秋葉健一）

日本カメラｍｏｏｋ
２０１１年８月
１８００円

こんな話あんな話第二一話　文明の利器と文化の意義

早いもので、このコラムの言いたい放題も、二十回を超えました。多くの方々から貴重なご意見を頂き、日々感謝と反省の気持ち新たです。

さて、今回のタイトルは難しく表記しましたが、中身は単純です。結論から言いますと、世の中で便利なものが「文明」なら、残さなければならないものが「文化」ということです。

小生のことを述べて恐縮ですが、写真を仕事と趣味の両股で足掛け半世紀弱。でも写真の歴史で言えば、その何分の一しか携わっていなかったことを思えば、ちっぽけな驕りでしかないかも、です。でもこの半世紀の間に写真の歴史は大きく変わり、それを撮るカメラは仕組み自体も変化を遂げたことは、読者自身もご承知のことと思います。

写真が果たした歴史的意義は、以前にもこの欄でお話いたしましたが、それを支えた道具達、特にカメラは「文明の利器」の一つに挙げられると思います。昔の人は筆やペンを使って自分の眼で見えるものを時間かけて写実したと思います。今や誰でも簡単に画像に記録して、いつでもそれを確認することができる。しかも真実を正確に。これが「文明の利器」でなくて何であろうか。文明とは常に変化を遂げ、人間に刺激を与える強壮薬ではないかと思います。でも、定着はしないのです。

さて、話を写真に戻します。写真を撮る道具のカメラは、フイルムからデジタルへ大きく変化して、平成生まれも二十歳を越えて若い方はデジカメしか見たことない世代が現れています。でも、カメラの歴史の中で、この「文明の利器」は着実に人間社会と生活に密着し、発展を遂げてきました。文明とはまさに、人間社会における便利さの追求そのものだと思います。文明の発祥地には必ず人が集まり形成しています。

さて文化となると文明と混同されがちですが、明らかにその意義は大きく違います。文化は旧いものと新しいものが織り成す歴史だと思います。

「きれい」が文明だとすると、「美しい」が文化です。わかりやすく言うと新鮮野菜にドレッシングをかけてパッと食べるのが文明で、野菜を漬物桶の中に入れ、暗い所へ置き、時間という時を刻んだものを食べるのが文化です。時間をかけた漬物はコクのある味がします。コクのある味とは隠し味の事で、それが文化なのです。

美しい家族の写真はその家の文化であり、かけがいのないものです。時を刻んだ大切な記憶です。写真文化も新しさを追求するよりも、熟成された旧き良き時代の美しさを表現できたらと思っています。風景も人物も撮る手段は変わっても、変わらない美しさは同じです。

だから、私たちは「きれいな写真」よりも「美しい写真」を撮りたいものです。それは必ず人の心に残るものだとの思いです。

（丸山慎一）

編集後記

梅雨の時期にはいります。これからの季節、菖蒲、紫陽花、露草etc花も雨に濡れてしっとりといい雰囲気になってきます。

竹内会長が東風協第１２号に寄稿されています。「梅雨を活用した撮影」を今一度読み返し、梅雨時の撮影に足を伸ばしてみてはいかがでしょう。

半夏生の翌日、仙台の資福寺、竹林の中でお琴の演奏もあります。絵になりますよ。